

「農力検定」 来年スタート予定 テキスト刊行

「食べものを自給する力を身につけ、地域の人々と支え合おう」と、農に関する基礎知識から、農山村との交流術までを解説した「農力検定テキスト」(コモンズ、1785円)が7月に刊行されました。

都市部に住む人々はエネルギーや食料を大量に消費しているが、自給力に乏しいのが現状です。そこで、一般社団法人・都市生活者の農力向上委員会の代表理事、西村豊さん(52)ら有志で「農力検定」を創設することになりました。

今回のテキスト(全7章)は活動の第一弾。「土に触れるきっかけをつくるのが目的」と西村さんは言います。

第1章の「キッチン農力検定」(執筆はベターホーム協会)では、残った野菜やそれまで捨てていた根や茎、へたから新たな根を生やして葉を育てるなど、台所での野菜栽培や家庭菜園のコツなど。2章以降は、日本の有機農業をリードする埼玉県小川町の金子美登さん、「半農半



テキスト制作にかかわった(右から)金子さん、西村さん、塩見さん

X」を提唱する塩見直紀さんらがそれぞれの分野に関わる内容を執筆。家族で自給的な生活を実践するフリーライターの新田穂高さんは、市民農園選びや無農薬栽培のポイントなど、サステイナブルコミュニティ・プロデューサーの大和田順子さんは、農業ボランティアの心得や都市と農山村との交流術などを紹介しています。

これから検定の問題の中身や判定基準などを詰め、「来年初めには試験を実施する予定」と西村さん。テキストの問い合わせはコモンズ(03-5386-6972)へ。

「テマヒマ展〈東北の食と住〉」 東京で8月26日まで

東京都港区赤坂9の「21_21 DESIGN SIGHT」(東京ミッドタウン・ガーデン内)で「テマヒマ展〈東北の食と住〉」が開かれています。

わら縄でつながれた「寒干し大根」。氷点下の寒風と日差しを利用した保存食で、切り方など地域によって個性があります。茶色い長靴は「ポッコ靴」と呼ばれ、天然ゴムを素材にした青森県の津軽地方の雪上作業靴。一度、製造が途絶えたものを地元の靴店が7年前に復活させました。そのほか、各地の伝統食や駄菓子、南部箒や会津漆器といった生活道具など計55種の品々が展示されています。

東日本大震災を受けて昨夏、同会場で開催された「東北の底力、心と光。「衣」、三宅一生。」に続く企画展。グラフィックデザイナーの佐藤卓さんとプロダクトデザイナーの深澤直人さんが中心となってチームを組み、東北6県の食文化や手仕事の技などをリサーチして構成しました。現代人が見失いつつある心のゆとり、循

環する暮らしのあり方を追求する目的です。

関連プログラムとして7月21日、哲学者で立教大学院教授の内山節さんと佐藤さんのトークがありました。内山さんは群馬県上野村に自宅を構え、東京と行き来する生活です。佐藤さんが「世の中が合理主義になり、人々が長い間、大切にしてきたものが失われつつあります」と問いかけると、内山さんは、効率優先の「絶えざる過剰生産」は「絶えざる過剰需要」を生みだすと指摘。「日本には亡くなった人が遠くに行かない社会観があった。死者とのつながりの中に自分がいる。これから歴史を取り戻さなければならない」と話していました。

同展は8月26日まで。火曜休。詳細はホームページ(<http://www.2121designsight.jp>)で。



東北の食と住にまつわる品々を集めたテマヒマ展



トークに参加した内山さん(左)と佐藤さん

毎日新聞社

水と緑の 地球環境本部 活動紹介

毎日新聞社 水と緑の地球環境本部は、地球環境問題に対する取り組みをさらに強化するため07年4月に誕生しました。「水と緑」は、地球上の生命とそれを取り巻く環境の豊かさを象徴しています。

毎日新聞は、地球環境問題を様々な角度から紙面で取り上げ、毎週月曜日の「環境面」のほか、地域の環境から地球環境に至るまで、随時、特集面を組んでいます。また、環境に関する各種イベントを開催。環境問題を紙面を通じてアピールするとともに、自らの行動していくことも大切であると考えています。

【毎日新聞社の主な環境問題への取り組み】

- 1949年 人口問題調査会を発足。93年。「国連人口賞」を受賞
- 91年 毎日新聞社企業理念に「生命をはぐくむ地球を大切にします」と記す
- 95年 日韓国際環境賞を創設(朝鮮日報社と共同)
- 96年 科学部を改組した「科学環境部」が発足。全国紙初の「環境面」をスタート
- 08年6月 毎日新聞社とNPOの共同事業体「毎日アースデイ」が港区立エコプラザの指定管理者として運営開始



2012年 8月・9月号

発行日・2012年7月31日

編集・発行・毎日新聞社 水と緑の地球環境本部

発行人・斗ヶ沢秀俊

〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1の1の1

TEL・03-3212-2607 FAX・03-5208-4946

E-mail・myeco@mainichi.co.jp

表紙イラスト・松井久生 デザイン・植月誠

【編集後記】

音楽家の坂本龍一さん(60)が「電気のために子どもの未来を危険にさらすべきではない」と呼びかけます。「私たちの集まりが、たちまち原発を止め、政府の方向を変えるか」と私は懐疑的。作家の瀬戸内寂聴さん(90)はこう発言しました。「それでも私たちは集まり、力を合わせていく」

東京の代々木公園で7月16日にあった「さようなら原発10万人集会」は、主催者側の目標を超え、東京電力福島第1原発事故後に高まった脱原発運動では最大規模となりました。それに続くデモの参加者は「原発いらない」「NO!再稼働」など、それぞれの思いを書き込んだプラカードやうちわを手手に歩いていました。

原発に頼らない社会を選択するからには「私たちの暮らしもチェンジ」というわけで、今号の消費者のコーナーでは「アンペアダウン」を実践している人々に登場していただきました。ナマケモノ倶楽部の「アンペアダウンプロジェクト」を発案したカナダ出身のピーター・ハウレットさん(57)は「我が家でもアンペアを下げた当初は、プレーカーが落ちるたびに子どもたちが悲鳴を上げていた。でも人は賢くなるもの」と話します。

暑い夏、無理してエアコンを止めて体調を崩すことは避けなければいけません。エネルギーの無駄遣いを減らし、過剰なサービスに「ノー」の声を上げていきたいですね。たまには明かりを消し、キャンドルで静かな夜を過ごすのもいいものです。(M)

【表紙の動物】

ヒマワリ: 原産地は北アメリカで、高さ3mほどに成長するキク科の一年草。大輪の花は太陽の動きにつれて回るといわれているが、実際はつぼみを付ける成長の盛んな若い時期だけで、開花後は基本的に東を向いて動かない。鑑賞や食用目的以外に、再生可能エネルギーのバイオディーゼル燃料として、活用が期待されている。

東京電力福島第1原発事故で、「土壌中の放射性セシウムを吸収する」と注目されたが、農水省の調査で除染効果は少ないと判断された。